



新報

故人年表下



古今人ある歌 終る部目録

時修の部

名月	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神





ぬりこ	三四	サ	三四	石の葉	三四	かゆ草	三四
木犀	三五	木の葉	三五	葉	三五	核のこ	三五
木の子	三五	草	三五	葉	三六	熟柿	三六
		生類之部		葉	三五	の葉	三六
虫	三七	秋の蟬	三五	秋の蟬	三七	秋の葉	三七
秋の蟻	三七	秋の蚊	三七	葉	三八	足	三八
さうりくす	三八	さうりくす	三八	の葉	三八	蟻	三八
ひさき	三八	ひさき	三八	の葉	三八	雁	三八
せきま	三九	せきま	三九	の葉	三九	雁	三九
帰てき	四一	帰てき	四一	の葉	四一	雁	四一
鳩	四二	鳩	四二	の葉	四二	雁	四二
冬を結	四四	冬を結	四四	の葉	四四	雁	四四

中人五の影向系

穰之部

南穂 暎旭菴集足 校合 行無患瓜少

名の中や池をぬりておますか  
 ぬりや川へまきまは瀬のりら  
 三井ちの所まきまやりのぬ  
 名つるやえつるまおまむき  
 ぬりやまのりらに木の影  
 ぬりやりのりらに木の影

月  
 湖春  
 其角  
 嵐雪

名月

明

名もや標よりよりを葉のかく  
明のよき能くも標よりより  
名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより  
名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより  
名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより  
名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより

去来  
執人  
標風  
李由  
轍士  
信純  
昌房  
山房  
利牛  
西彦  
柳井

初下

名

名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより  
名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより  
名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより  
名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより  
名もやゆめおきてよき標よりより  
明のよき能くも標よりより

杉風  
海平  
毒因  
珈流  
伴六  
本師  
山輝  
梅路  
彦純  
山房



沙舟

三日

たつたの舟もさうかに家のおもてを  
おぼやけと目おぼやけありぬ神も  
さうしやうとてゆく二日のたつた舟  
又も人も多しおぼやけのたつた舟  
おぼやけとて陸のたつた舟も

舟  
舟  
舟  
舟  
舟

何事かおぼやけにも似て三日の舟  
三日の舟もさうかに家のおもてを  
おぼやけと目おぼやけありぬ神も  
さうしやうとてゆく二日のたつた舟  
又も人も多しおぼやけのたつた舟  
おぼやけとて陸のたつた舟も

舟  
舟  
舟  
舟  
舟

舟

舟もさうかに家のおもてを  
おぼやけと目おぼやけありぬ神も  
さうしやうとてゆく二日のたつた舟  
又も人も多しおぼやけのたつた舟  
おぼやけとて陸のたつた舟も

舟  
舟  
舟  
舟  
舟

舟もさうかに家のおもてを  
おぼやけと目おぼやけありぬ神も  
さうしやうとてゆく二日のたつた舟  
又も人も多しおぼやけのたつた舟  
おぼやけとて陸のたつた舟も

舟  
舟

十の五 海の時

ひさしにやあしうのきさるゝ元の名  
勿れよひきまふ舟のあはれまうぬ  
ひさしにやあしうのきさるゝ元の名  
十のあやめあまのほろろ人の子思  
ひさしにやあしうのきさるゝ元の名  
舟の代よれきさるゝ元の名

木もみちのくもさるゝ元の名  
ひさしにやあしうのきさるゝ元の名  
船もみちのくもさるゝ元の名  
舟の代よれきさるゝ元の名  
海もみちのくもさるゝ元の名

大東  
明  
猿  
乙  
作  
多  
多

多  
多  
多  
多  
多  
多  
多  
多

星の夜

舟もみちのくもさるゝ元の名  
舟の代よれきさるゝ元の名  
舟もみちのくもさるゝ元の名  
舟の代よれきさるゝ元の名  
舟もみちのくもさるゝ元の名

舟もみちのくもさるゝ元の名  
舟の代よれきさるゝ元の名  
舟もみちのくもさるゝ元の名  
舟の代よれきさるゝ元の名  
舟もみちのくもさるゝ元の名

舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟

舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟



新田  
姓

其のこを林の峯本や吉川と  
通すの橋に徳尾母と新田

梨野  
杉候

文

文の中と自ら輩の意を似  
ぬしやひらういおき娘の子

其角

子

いよいよ子孫を産る人止  
いのちの嶽のさつきを山

千子  
去来

藤

お世事も自ら法をすたれ  
志す望みのさうろつと柳  
さきのたのききききいぬ

泥足  
舎屋  
何化

秋

秋篠のまきと秋うみの故  
まつ秋のゆきとまきお  
ゆきの葉をまつと秋の  
まつ秋のまきと秋のあ  
ひきとまきのまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の  
まきと秋のまきと秋の

若  
嵐雪  
出心  
之道  
鬼妻  
北後  
茶少  
西川  
柳野  
石橋  
石橋

七 又 立 琴

昔の船中へお針をさすはちのぬ  
 毎のそをた捲つてお針をさすは  
 針もさすはちのぬのぬをさすは  
 七夕や晴る川にさすはちのぬ  
 ちよほちよほちよほちよほちよほ  
 ちよほちよほちよほちよほちよほ  
 ちよほちよほちよほちよほちよほ  
 ちよほちよほちよほちよほちよほ  
 ちよほちよほちよほちよほちよほ  
 ちよほちよほちよほちよほちよほ  
 ちよほちよほちよほちよほちよほ

其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角

七 又 立 琴

大切ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 生のお中ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 け界ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角  
 其角

千 蘭 盆 待 言 灯 篋

金魚うろた 鉢をよみにありけり  
空あふと けりけりかきや盆のうろ  
盆をよの 仙傳の盆のけりけり  
うろた人の中水の盆のけりけり  
待待ゆえのまじり盆のけりけり  
盆のけりけりけりけりけりけり  
盆のけりけりけりけりけりけり  
盆のけりけりけりけりけりけり  
盆のけりけりけりけりけりけり

待子  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆

竹 篋 正 待 送 中

見るとも 竹篋のけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり  
竹篋のけりけりけりけりけり

其角  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆  
盆

云見

糸

玉ちつりも焼場のりふり  
よきくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見

玉ちつりも焼場のりふり  
よきくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見  
白きくもたまきふり一云見

桐 經

蓬 飯

精美の好き一人をあめり  
賞時にさるる部を一玉ちつり  
魂極の奥あめり一や親の意  
此はたかやきかたを捨て獲のこ  
いふ人の人えんて玉ちつり

大草  
紫風  
去来  
冬結  
而明

桐經やまきふり一をや子獲  
常て桐經やまきふり一をや子獲  
桐經やまきふり一をや子獲  
桐經やまきふり一をや子獲  
桐經やまきふり一をや子獲  
桐經やまきふり一をや子獲  
桐經やまきふり一をや子獲  
桐經やまきふり一をや子獲  
桐經やまきふり一をや子獲  
桐經やまきふり一をや子獲

如外  
主角  
白糍  
舎六  
一板友  
支考

墓 活 身 金 ね

家ある皆其子あり其子の墓を  
死し人も孫子に形うつてたうら  
白珠なき死の神や墓をよめて  
町の墓の形なき墓をよめて世  
生る魂は石のさうらぬ親より  
せめて魚の骨よりたうら生る魂  
たうら生るよりたうら生る魂  
たうら生るよりたうら生る魂  
たうら生るよりたうら生る魂

其角 去来 一其 其角 方山 改村 龜洞 李生 聖波 歌白

痛 如 瓜

一ちのり終人終るた地ゆるり  
痛る和慈のあひもをたうら  
白ひは法中の中か痛の形  
痛るあやあき娘のあひひ  
門くの言葉かぬえをたうら  
あひひはひひひひひひひひひひ  
世も終るたうらあひひひひひひ  
魚人のあひひひひひひひひひひ  
板の間に子のあひひひひひひ  
あひひひひひひひひひひひひ  
あひひひひひひひひひひひひ

其角 許六 其角 任作 去来 其角

名火残暑

てある名火男の好まひるふ  
 けはるをいさよいさよの火うぬ  
 ちうとていぬあまのいぬ火び  
 川はらわぬ火の中よるこふ  
 亡月人の船多うぬけぬ火うぬ  
 名火うぬぬあやあぬさうす川

其角  
 外寂  
 桂々  
 香花  
 虫香  
 百部

あつそくの名火うぬこらと名火  
 秋もやういづきりいぬあつさ  
 名もあつて飯もあつて日あつて  
 夕暮もあつてあつてあつてあつて  
 秋もあつてあつてあつてあつて

曲翠  
 乙生  
 吉女  
 師言  
 支考

相撲

よる名の子の中や角力取  
 都もも経中やアアアアアア  
 角力取あつてあつてあつてあつて  
 十八とつてもあつてあつてあつて  
 中帯く名火うぬぬぬぬぬぬぬ  
 名もあつてあつてあつてあつて  
 角力取あつてあつてあつてあつて  
 名もあつてあつてあつてあつて  
 世もあつてあつてあつてあつて  
 名もあつてあつてあつてあつて  
 名もあつてあつてあつてあつて  
 名もあつてあつてあつてあつて

其角  
 吉女  
 師言  
 支考  
 曲翠  
 乙生  
 吉女  
 師言  
 支考

# 蛸 風

虫らして日老ちて形くも秋の風  
 牛部な子蚊の死よはい 蛸乃風  
 かへくもあはれあふ歯わあまの風  
 秋風平志く木の弓に結らるる  
 苔の草や秋風くく秋風を  
 梅枝く印形者のちく秋の風  
 秋風の七巻ゆき冷きめ  
 蛸風のくくくくく人の顔  
 刺きくくくくくくくくくく  
 物汁や那くくくくくくく  
 ちくくくくくくくくくくく  
 ぬれくくくくくくくくくく

為  
 杉風  
 去来  
 高台  
 雪台  
 恒孝  
 思愛  
 曲愛  
 正書  
 科人  
 支考

秋風や細かくもていかに入  
 ちくくくくくくくくくくく  
 安れくくくくくくくくくく  
 故も天子の風あてり秋の風  
 ちくくくくくくくくくくく  
 秋風やお子の毒のあつらへく  
 命もあまのあまのちくくくく  
 蛸風や死をくくくくくくく  
 秋風をくくくくくくくくく  
 蛸風やあまのあまのちくくく  
 葉の草のちくくくくくくく

葉子  
 改通  
 子那  
 許ら  
 鳴を  
 本白  
 帆雪  
 岩白  
 葉雀  
 子尹  
 許六  
 石竹

舟子

舟子舟をこぎ風を志す舟子

其角

舟

舟は舟をこぎ風を志す舟子

小春

捨

捨は舟をこぎ風を志す舟子

舟

山

山は舟をこぎ風を志す舟子

舟子  
山  
舟  
舟

舟

舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子  
舟は舟をこぎ風を志す舟子

舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟  
舟



雨物

雨物や二層をとおる人の子  
帆をうららの舟の中の方の舟は  
秋をうら東のうらさす舟は  
あつとつとふ舟をうら東の方の舟

涼巻  
北境  
小湊  
芦角

後の  
けお入

けお入をのこして京の陣うら  
やあ入の中物さうもあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと

許六  
泉平  
一江

二言  
十也

からあつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと

去路  
去路  
好味

あ 稲

稲あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと  
あつとつとあつとつとあつとつと

其年  
去路  
和及  
檜皮  
王ん  
燕雀  
あつとつと  
あつとつと  
あつとつと

分 野

持もさのんけしやうんてふのり  
あれしてまを海也くのりけ  
一まのりか—まあかをりか  
小あややあかひもふかてつ  
めんをわあかかひかてつ  
わい—あやかのりかよてつ  
漢のあまあかてあまあま  
能のあまあまてあまあま  
日初うかあかてあまあま  
湯りあかのまをてあまあま  
あまあまあまあまあま  
月つてあまあまあまあま

了  
持  
作  
あ  
一  
修  
あ  
源  
柳  
る

早 船 尾 船

早船のまを解あまてあま  
すくまをあま船の白ひのあま  
まをあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま

あ  
乙  
木  
乙  
其  
木  
乙  
乙  
乙  
乙  
乙  
乙

本 糸 取 田 列 晚 輪

本糸やて作跡の山をるの雲  
か野のくも取神のぬらぬり  
糸の子一本糸を結るは所う形  
新うくも押まき心代のくまの書  
里のくも昇まじりおる糸糸小

其角 泥屋 卜茂 晚山 水

望向糸を結かりは川結  
くまのくも晴さぬさくかうたひ  
輪うくくも糸もむくまひ糸  
根のけくくまを結るは輪う形  
まきくも糸も結るは輪う形

山川 杉風 元北 支考 改述

燒 糸 後 送 入 神 瀬

燒糸や糸を結かりは川結  
わた糸や糸を結るは輪う形  
くまのくも晴さぬさくかうたひ  
唐炬をたけらくも結るは輪う形

史那 中沙 花守 春亭

糸入や根の梢も啼くは  
くまのくも晴さぬさくかうたひ

馬山 梨屋

神瀬や糸の結かりは川結  
くまのくも晴さぬさくかうたひ  
糸のくも晴さぬさくかうたひ  
くまのくも晴さぬさくかうたひ

新号 元北 巴道 柳井

八

約 通 約

八舞子歌のたぐひ一舞子の歌  
たぐひのたぐひのたぐひのたぐひ  
い初や舞子の足たをり  
い初や舞子の足たをり

八舞子歌のたぐひ一舞子の歌  
たぐひのたぐひのたぐひのたぐひ  
い初や舞子の足たをり  
い初や舞子の足たをり

許六  
舎九  
乙中  
起波

許六  
舎九  
乙中  
起波

紋 生

子 鳴

子

紋生  
子鳴  
子鳴  
子鳴

子鳴  
子鳴  
子鳴  
子鳴

子鳴  
子鳴  
子鳴  
子鳴

乙中  
其角  
可授

乙中  
其角  
可授

乙中  
其角  
可授

室山子

世新とも形もて朽めり室山子  
 道にさうけいふあつたかしく  
 種もりの儀やさうけいふ  
 乞食にも似たりかしく  
 居風名の下やかしく身の  
 物のさをひくきをさうけい  
 けいさのめりかしくかしく  
 経烟をかかしくかしく  
 一徳もさうけいかしくかしく  
 山室を就るにさうけいかしく  
 遊めども持きて老るかしく

西条  
 柳原  
 破屋  
 大草  
 凡兆  
 柳若  
 孫若  
 支考  
 温故  
 号破

引板

友

結

夫山の麓をりつと引板乃き  
 又山に昔き多愛をわびこの  
 時を引板をりつと書もり

くわきや志も山向の友  
 林もさかきする友の如き  
 是かしく引一まんよる

えさるも結をひらう形  
 結をひて石さうけい  
 結をひて結をひて  
 結をひて結をひて

史邦  
 路通  
 能也

鳥  
 鳥身  
 大座

山  
 山  
 山  
 山  
 山  
 山  
 山  
 山  
 山  
 山

葉

時果作念のすこかやうしを葉  
久きもきんはひりやひりや  
形代の果あを枝くわす葉

大葉  
形代  
白貴

神

まの鏡や市中を過すは伊弉  
神をまや細代の方の鏡言ふと  
まのまの鏡をまのまのまの  
神鏡子使右もまのまのまの

伊弉  
まのま  
神鏡

鏡

約あまは鏡の鏡子た力の鏡  
鏡まのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまの

まのま  
鏡子  
柳枝

河

かすまの鏡や浪の下世せし  
川まのまのまのまのまの

河  
浪中

鏡

て時を早まをたのまのまの  
鏡まのまのまのまのまの

鏡  
たのま

鏡

まのまのまのまのまのまの  
鏡まのまのまのまのまの

鏡  
まのま

鏡

まのまのまのまのまのまの  
鏡まのまのまのまのまの

鏡  
まのま

# 新市

新市は子信徳の武士きやあし  
 中守の新市はあまのき下り  
 新市はあまのき下り  
 新市はあまのき下り

新市  
 新市  
 新市  
 新市

新市はあまのき下り  
 新市はあまのき下り  
 新市はあまのき下り  
 新市はあまのき下り

新市  
 新市  
 新市  
 新市

# 橋

橋はあまのき下り  
 橋はあまのき下り  
 橋はあまのき下り  
 橋はあまのき下り

橋  
 橋  
 橋  
 橋

漸 之 朝 之 寒

秋の御座りしうらやまの御座りしうらやま  
 御座りしうらやまの御座りしうらやま

秋の御座りしうらやまの御座りしうらやま  
 御座りしうらやまの御座りしうらやま

入麩の下葉はたはたの御座りしうらやま  
 御座りしうらやまの御座りしうらやま

秋の御座りしうらやま

秋の御座りしうらやま

秋の御座りしうらやま

客人の御座りしうらやまの御座りしうらやま  
 御座りしうらやまの御座りしうらやま

客人の御座りしうらやま



# 新 瀧 湯 酒

足安の亭より河を新瀧の  
 舟より新瀧の人の船をまじ  
 糺すも新瀧の酒のつらさ  
 神楽の御うさぎく新瀧の船  
 舟風に新瀧をまじす山吹の  
 舟を舟の神より舟の船  
 舟者の舟も舟に答新瀧の船

其舟  
 嵐舟  
 神舟  
 舟結  
 舟者  
 舟者  
 舟者

酒酒の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟

舟者  
 舟者  
 舟者

# 共 交 庭

舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟  
 舟の舟をまじす舟の舟

舟者  
 舟者  
 舟者  
 舟者  
 舟者  
 舟者  
 舟者  
 舟者

種 乃 暮

枯枝にけりしづきけりし秋の暮を  
か風の初をぬきぬきて歸るを  
秋のふき向をぬきぬきて  
遊ぬる海をぬきぬきて  
まらぬ海をぬきぬきて  
ふちぬきぬきぬきぬきぬき  
物にぬきぬきぬきぬきぬき  
ゆりぬきぬきぬきぬきぬき  
秋のふきぬきぬきぬきぬき  
大なるぬきぬきぬきぬき  
いしぬきぬきぬきぬきぬき  
大なるぬきぬきぬきぬきぬき

水二

霜  
才磨  
其角  
光を  
出芳  
吉を  
秋人  
一作  
一筆

持

秋の暮ぬきぬきぬきぬきぬき  
ゆりぬきぬきぬきぬきぬき  
秋のふきぬきぬきぬきぬき  
物にぬきぬきぬきぬきぬき  
秋のふきぬきぬきぬきぬき  
秋のふきぬきぬきぬきぬき  
秋のふきぬきぬきぬきぬき  
秋のふきぬきぬきぬきぬき  
秋のふきぬきぬきぬきぬき  
秋のふきぬきぬきぬきぬき

水乃  
水乃  
水乃  
水乃  
水乃  
水乃  
水乃  
水乃  
水乃  
水乃

葡萄

家より取りて入るはぬき  
志々空の味の結ぶはぬき

房秋  
文書

梨

梨をとりて入るはぬき  
うり梨や秋の夜の空の味

山梨  
乙州

名

多量な粉を山田の時の夕に  
解きほくると魚の味はぬき  
畑のうらぬきとせつる多量に  
十重のうらぬきとせつる多量に

其角  
乙州  
乙州  
乙州

賞

秋の  
ふ相

一斗のうらぬきとせつる多量に  
藤抱てぬきとせつる多量に

石草  
葉草

秋 雨 家 梨

秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に  
秋の雨はぬきとせつる多量に

秋の雨  
秋の雨  
秋の雨  
秋の雨  
秋の雨  
秋の雨  
秋の雨  
秋の雨  
秋の雨  
秋の雨

一葉

一葉しく水ゆく相のあきなり  
初らぬをぬきし初め二葉あり  
相のあきもいづれをかにし井たのあ  
おくのあきなるも下に居あはれ  
西風に初めすもさるるあはれ

尚か  
明る  
然元  
鬼つ  
る破

柳散

あきのちりて中かふるまふ柳は  
ちり影も初らるるきわちり柳  
形よりたれあめり風の柳散る  
さる柳より一葉しくや散る柳  
ちりて初る柳もあきさる散るりり

さる風  
出さる  
る士  
散る  
初る

草花

草花のちりてちりてちりて  
あきのちりてちりてちりて  
あきのちりてちりてちりて  
あきのちりてちりてちりて  
あきのちりてちりてちりて

草花  
あき  
ちり  
ちり  
ちり

草花

あきのちりてちりてちりて  
あきのちりてちりてちりて  
あきのちりてちりてちりて  
あきのちりてちりてちりて  
あきのちりてちりてちりて

草花  
あき  
ちり  
ちり  
ちり

木 橙

木橙の味を橙と云ふ所の加さし  
氣味は酸も甜も少しは木橙の味  
もよくけし好くても好くてもか  
木橙の味もよくてもよくても好  
味しき木橙の味もよくても好  
味の團の中に木橙を多く木橙の  
味もよくても好くてもよくても  
好くても好くても好くても好く

木橙 山岳 梨一 木橙

葛 花

葛花の味を葛と云ふ所の加さし  
氣味は酸も甜も少しは葛の味  
もよくけし好くても好くてもか  
葛の味もよくてもよくても好  
味しき葛の味もよくても好  
味の團の中に葛を多く葛の  
味もよくても好くてもよくても  
好くても好くても好くても好く

木橙 山岳 葛花

葛 子

葛子の味を葛と云ふ所の加さし  
氣味は酸も甜も少しは葛子の味  
もよくけし好くても好くてもか  
葛子の味もよくてもよくても好  
味しき葛子の味もよくても好  
味の團の中に葛子を多く葛子の  
味もよくても好くてもよくても  
好くても好くても好くても好く

木橙 山岳 葛子

葛 枝

葛枝の味を葛と云ふ所の加さし  
氣味は酸も甜も少しは葛枝の味  
もよくけし好くても好くてもか  
葛枝の味もよくてもよくても好  
味しき葛枝の味もよくても好  
味の團の中に葛枝を多く葛枝の  
味もよくても好くてもよくても  
好くても好くても好くても好く

木橙 山岳 葛枝

葛 珠

葛珠の味を葛と云ふ所の加さし  
氣味は酸も甜も少しは葛珠の味  
もよくけし好くても好くてもか  
葛珠の味もよくてもよくても好  
味しき葛珠の味もよくても好  
味の團の中に葛珠を多く葛珠の  
味もよくても好くてもよくても  
好くても好くても好くても好く

木橙 山岳 葛珠

男 一

男一の味を男と云ふ所の加さし  
氣味は酸も甜も少しは男一の味  
もよくけし好くても好くてもか  
男一の味もよくてもよくても好  
味しき男一の味もよくても好  
味の團の中に男一を多く男一の  
味もよくても好くてもよくても  
好くても好くても好くても好く

木橙 山岳 男一

木橙 山岳 男一

顔 報

葉や空を横おらす川の松  
 柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちやあつたさうし  
 顔鳥のまゝに好みのにじ  
 葉味を控しゆくをささく  
 安さうちの種とる人のち  
 柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちの種とる人のち  
 柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちの種とる人のち  
 柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちの種とる人のち

若 杉 風  
 使 邦  
 巴 舞  
 月 喜  
 和 乃  
 平 交  
 木 因  
 戈 磨  
 智 元  
 柳 若  
 若 枝

葉 秋 葉

柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちの種とる人のち  
 柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちの種とる人のち  
 柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちの種とる人のち  
 柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちの種とる人のち  
 柳鳥や其の白くは花の如  
 安さうちの種とる人のち

若 杉 風  
 使 邦  
 巴 舞  
 月 喜  
 和 乃  
 平 交  
 木 因  
 戈 磨  
 智 元  
 柳 若  
 若 枝

秋

志す亦もあわさぬ秋のうらみ  
秋のあかあしく空の清く  
あかあしくあかあしく  
あかあしくあかあしく  
あかあしくあかあしく  
あかあしくあかあしく  
あかあしくあかあしく  
あかあしくあかあしく  
あかあしくあかあしく  
あかあしくあかあしく

あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく

秋

秋

秋風のりや秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ

秋風のりや秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ  
秋のうらみ秋のうらみ

あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく  
あかあしく

狸 乃 是

しらの地の所へくねるの心  
向きの子母をわたりくねるの心  
母しらの母をうへくねるの心  
狸所のくねるの心  
神風をうへくねるの心

土芳  
山崎  
赤久  
芝柳  
ら佳

中 椒

きくてもめくさよのちをうへくねる  
紫の子母をわたりくねるの心  
母しらの母をうへくねるの心  
るはくねるの心  
るはくねるの心

青  
赤久  
赤久  
赤久  
赤久

瓜 糸瓜

瓜の子母をわたりくねるの心  
母しらの母をうへくねるの心  
るはくねるの心  
るはくねるの心  
るはくねるの心  
るはくねるの心  
るはくねるの心  
るはくねるの心  
るはくねるの心  
るはくねるの心

長  
瓜  
瓜  
瓜  
瓜  
瓜  
瓜  
瓜  
瓜  
瓜



蓮の  
実

け蓮のやちを花を植のよらしく句  
てくすのよるは増もなるは花より

精能  
芦花

蘭

蘭の中をわらぬやうのくす中  
ら子のよを花を植のよらしく句  
庭より植く句を花を植のよらしく句  
茶室や東海を花を植のよらしく句

坑藤  
東切  
巴都  
石明

さ  
て  
城

ささけはささけを花を植のよらしく句  
芭蕉はささけを花を植のよらしく句  
城はささけを花を植のよらしく句  
母より花を植のよらしく句

乙妙  
高川  
卜城  
白貴

花  
聖

花のよらしく句を花を植のよらしく句  
あれはささけを花を植のよらしく句  
中より花を植のよらしく句  
庭より花を植のよらしく句  
茶室や東海を花を植のよらしく句  
文相はささけを花を植のよらしく句

岩を  
文孝  
之梅  
紫平  
高川  
高川

桔  
枝

桔のよらしく句を花を植のよらしく句  
あれはささけを花を植のよらしく句  
中より花を植のよらしく句  
庭より花を植のよらしく句  
茶室や東海を花を植のよらしく句  
文相はささけを花を植のよらしく句

高川  
楓葉  
柳枝  
高川

薄

紫  
苑

志らるるの夜物言ひは  
花さき身踏子つとぬく  
年くした古根のさ  
ふにすくたたは  
鹿あてくさ  
船ひきの一掃きりす

其角  
嵐を  
修所  
牧亭  
有有  
吉東  
那亭  
半版  
極毒  
る物

葉  
野

心  
畧

世をゆく  
牛飼く  
春風も  
長も  
さる所の  
花

柳隣  
公久  
巴都  
那新  
高半  
石玉  
半解  
心  
多段  
吉和

風

技折戸子葉浦の春あり風心むし  
此の如くお中も春一風心むし  
風心むしお中も春一風心むし

珠明  
中野  
る

鶯

鶯の如くお中も春一風心むし  
此の如くお中も春一風心むし  
鶯の如くお中も春一風心むし

了平  
車庫  
巴野  
ま  
さ  
る  
る

花

お中も春一風心むし  
此の如くお中も春一風心むし  
お中も春一風心むし

其  
才  
体  
風

梅

梅の如くお中も春一風心むし  
此の如くお中も春一風心むし  
梅の如くお中も春一風心むし

光  
遊  
乙  
乙  
其  
る

廿七  
廿八

川船やうしつゝほくく其のいん  
龍をわしと船あはきや其の母  
けきの物やうしつゝほくく其のいん  
舟のあやうしつゝほくく其のいん

龜子  
小枝  
改匠  
太字

廿九

葉の香もなほやけり昔の屋  
をわらうしつゝほくく其のいん  
葉の香もなほやけり昔の屋  
其をうしつゝほくく其のいん  
かきかきおをわしつゝほくく其のいん  
いゝおのいんわしつゝほくく其のいん  
物さしつゝほくく其のいん

海  
其舟  
光を  
支考  
卯七  
子山

りあまおつて葉はやうしつゝほくく其のいん  
余のあまのうしつゝほくく其のいん  
若く本線の下下しつゝほくく其のいん  
田舎をうしつゝほくく其のいん  
山政のうしつゝほくく其のいん  
いゝおのいんわしつゝほくく其のいん  
借りおしつゝほくく其のいん  
夜のうしつゝほくく其のいん  
ゆゑおのいんわしつゝほくく其のいん  
家ておのいんわしつゝほくく其のいん  
とつゝほくく其のいん  
十のうしつゝほくく其のいん

二  
和存  
支考  
岩白  
執人  
曉龍  
太字  
海  
巴  
其  
其  
其

花屋

あつ種を植へてふとふ花屋の  
ひらきと経本とを植へたはあか  
ひらきとてさしもの好む花屋の  
雲り好くたふとあつ花屋の

梅の  
巴道  
古く  
る印

末

末花の馬も解くさし川ちの  
いら花の串のたしと好むと  
く好むとあつ花屋の

其角  
一山  
る印

枯

枯井の中子川を好むと瓜  
舟好むとさし川を好むと

少頃  
高年

香

瓜

葛

はち花を井の中を好むと瓜  
はち花を井の中を好むと瓜  
はち花を井の中を好むと瓜  
はち花を井の中を好むと瓜

扇  
故是  
秋之  
柳花

梅

梅の花を好むと梅の花を好むと  
梅の花を好むと梅の花を好むと

かま  
張道

好

好むと好むと好むと好むと  
好むと好むと好むと好むと

好  
聖經  
好む

芋

芋の葉は赤い花は白のやき油  
芋の根は皮をむき煮ると  
山椒の芋は煮ると皮はむき  
芋の葉は赤い花は白のやき油  
芋の根は皮をむき煮ると

芋  
山椒  
芋  
芋

芋  
芋

芋の葉は赤い花は白のやき油  
芋の根は皮をむき煮ると

芋  
芋

か  
芋

芋の葉は赤い花は白のやき油  
芋の根は皮をむき煮ると

芋  
芋

木  
木

木の葉は緑の花は白のやき油  
木の根は皮をむき煮ると

木  
木

木  
の  
実

木の葉は緑の花は白のやき油  
木の根は皮をむき煮ると

木  
の  
実

木  
の  
葉

木の葉は緑の花は白のやき油  
木の根は皮をむき煮ると

木  
の  
葉

木  
の  
実

木の葉は緑の花は白のやき油  
木の根は皮をむき煮ると

木  
の  
実

# 草

松葉の香は木の葉の香に似たり  
神草の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり

草  
松葉  
松葉  
松葉  
松葉  
松葉  
松葉  
松葉

# 草

松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり  
松葉の香は木の葉の香に似たり

草  
松葉  
松葉  
松葉  
松葉  
松葉  
松葉  
松葉

# 栗

栗の香は木の葉の香に似たり  
栗の香は木の葉の香に似たり  
栗の香は木の葉の香に似たり  
栗の香は木の葉の香に似たり  
栗の香は木の葉の香に似たり  
栗の香は木の葉の香に似たり  
栗の香は木の葉の香に似たり  
栗の香は木の葉の香に似たり

栗  
栗  
栗  
栗  
栗  
栗  
栗  
栗

# 柳

柳の香は木の葉の香に似たり  
柳の香は木の葉の香に似たり  
柳の香は木の葉の香に似たり  
柳の香は木の葉の香に似たり  
柳の香は木の葉の香に似たり  
柳の香は木の葉の香に似たり  
柳の香は木の葉の香に似たり  
柳の香は木の葉の香に似たり

柳  
柳  
柳  
柳  
柳  
柳  
柳  
柳

葉紅

葉紅

分の色あつたつはけしあけあけ  
とまの葉はさしつ貴といふもの  
物の葉は下やささささのすうね

かつたてて葉を風に掃きしはあけ  
ふふの相和もあつたまの葉は  
葉の中み目のいろはあけあけ  
葉のいろあけあけあけあけあけ  
北山よふふのあつたものさか  
ちさつたまの葉をさしたあけあけ

西条  
あけあけ  
巨控

其角  
支考  
一欠  
乙生  
柳花  
入楚  
而助

虫

秋  
蟬

あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ

あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ  
あつたまの葉をさしたあけあけ

乙生  
怒風  
句空  
念家  
思つ  
大村  
春浩  
乃紋

大車  
咲山



秋の 楓 菊 松

遊ばくきけき遊ばく秋の松  
 其うのきけき遊ばく秋の松  
 秋乃松菊何れも種くちりあき  
 秋の向ふきのきけき秋の松  
 秋の向ふきのきけき秋の松  
 秋の向ふきのきけき秋の松  
 秋の向ふきのきけき秋の松  
 秋の向ふきのきけき秋の松

柳 松 菊 楓  
 柳 松 菊 楓  
 柳 松 菊 楓  
 柳 松 菊 楓  
 柳 松 菊 楓

秋 情 出 巻

秋の情 秋の情 秋の情  
 秋の情 秋の情 秋の情  
 秋の情 秋の情 秋の情  
 秋の情 秋の情 秋の情  
 秋の情 秋の情 秋の情  
 秋の情 秋の情 秋の情  
 秋の情 秋の情 秋の情

柳 松 菊 楓  
 柳 松 菊 楓  
 柳 松 菊 楓  
 柳 松 菊 楓  
 柳 松 菊 楓

鏝 碎

志の物並ぬく鏝の下やううくは  
灰け桶の中を回しうくかきしす  
平の面をひかき掃り改定の鏝碎  
糸のすじをひき掃き掃きうり  
桶の輪や切て掃かむ 大巻  
布しうくも扉入りう鏝碎  
焼や灰の中よりうくかきしす  
かきしす掃き掃きうり  
鏝碎を石の掃きうり  
梅のふ人のかきしす  
平の面をひかき掃り改定の鏝碎  
はお舟の碇かきしす

角 凡 北 雲 川 磯 舟 呂 洗 岳 洗 淡 秋 心 後 丈 村 翁 号 之 派

機 織 一 言

其風名を物いへありかきしす  
かきしすを掃きうり  
機織りや也きも桶の糸は業  
延舌うかきしす  
乾符の目くかきしす  
綿の糸をひかきしす  
あうくも月夜を掃きしす

帯 因 乙 中 走 唯 石 明 巴 舞 五 路 乙 派 以 月 許 乙 呂 身 梅 奇

蟬 蟻 蟻 蟻 蟻  
の 蟻 蟻 蟻 蟻

蟬の歌いゝるにゆくゆくは  
 かゝるまのや若き道中蟻の  
 蟻蟻の腹をひりぎをふの  
 かのりくのあつひ物のまゝ  
 一の法もやきまつかはしく

北後 孤存 芳常 史部 舟舟

新あゝのやちりやちりは  
 雲白に志すやちりのちり足  
 蟻蟻の戸の櫃はちりか  
 蟻田のちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちり

望經 成久 不卜 風子 舟舟

蟻 蟻 蟻

蟻の常出さるるは  
 蟻のちりちりちりちり  
 蟻のちりちりちりちり

柳舟 杉山 柳舟

蟻の常出さるるは  
 蟻のちりちりちりちり  
 蟻のちりちりちりちり  
 蟻のちりちりちりちり  
 蟻のちりちりちりちり  
 蟻のちりちりちりちり  
 蟻のちりちりちりちり  
 蟻のちりちりちりちり

青 去来 昌徳 昌徳 昌徳 昌徳

雁

船の中のとれし時雁の聲  
岸の邊を這う雁の船のこ  
こ舟のわし船のこ舟のこ  
あしをこ舟のこ舟のこ  
又舟のこ舟のこ舟のこ  
舟のこ舟のこ舟のこ  
舟のこ舟のこ舟のこ  
舟のこ舟のこ舟のこ  
舟のこ舟のこ舟のこ

源光  
其角  
物  
猪  
支  
杉  
杉  
杉  
杉  
杉

鶯

世の中を鶯の聲も那  
世の中を鶯の聲も那  
世の中を鶯の聲も那  
世の中を鶯の聲も那  
世の中を鶯の聲も那

凡兆  
水因  
横凡  
多碎

歌

鶯あくや入るさーあむ小ね  
その情をさるさるさる  
その情をさるさるさる  
その情をさるさるさる  
その情をさるさるさる

凡兆  
水因  
横凡  
多碎

歌

あつたの心の中さるさる  
あつたの心の中さるさる  
あつたの心の中さるさる  
あつたの心の中さるさる  
あつたの心の中さるさる

凡兆  
水因  
横凡  
多碎

驚

驚きの月の今や華を如く情驚  
そのおかしくあつてうら  
西の移を山ありてさう情の  
かひもさうも悲のうら  
那くおかしくあつて情の  
さうもさうも打もさうも  
さうもさうも情のうら  
あつてさうも情のうら

月  
支考  
情  
珍  
驚  
支考  
山  
支考

帰  
云

こねて来てしねてうら  
てさうも帰のうら

四  
支考

田

は所はさうも田のうら  
あつてさうも田のうら  
あつてさうも田のうら  
あつてさうも田のうら  
あつてさうも田のうら

支考  
田  
支考  
支考

野

野のうら  
あつてさうも野のうら  
あつてさうも野のうら

支考  
山  
支考

山  
別

山のうら  
あつてさうも山のうら  
あつてさうも山のうら

支考  
支考

修

集

集

修めりや修持りしものには由  
てんや中りあはれし年のはり  
坤くしの修めくまのめりぬ

集のよきものをはたすを  
志す由中りあはれし年のはり

ひんと修持をたすはりし年の集  
進んて修持のよきものを集  
出たりしや由の修持をたす集  
す南大所 進みしはりし年の集  
集のよきものをはたすを

集のよきものをはたすを  
志す由中りあはれし年のはり  
坤くしの修めくまのめりぬ  
集のよきものをはたすを  
志す由中りあはれし年のはり  
坤くしの修めくまのめりぬ  
集のよきものをはたすを  
志す由中りあはれし年のはり  
坤くしの修めくまのめりぬ

海舟  
舟  
之

樹  
全

舟  
北  
志  
西  
深

一  
車  
中  
友  
乙  
名  
女  
柳  
大  
松  
名



秋のゆくや早の半ゆへへのま  
せりさるるもほりきせなにおしあれ  
十におおや秋のうりのまのま  
形もそとのまのうりのま  
夕方のまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
おのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま

月  
史部  
て生  
柳井  
三明  
菊岡  
之道  
了半  
胡及  
如雪  
正秀  
游刀

蓮のまのまのまのまのま  
秋と川やゆくまのまのま  
おのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま

史部  
た次  
字比  
利合  
一柳  
撲ル  
知者  
柳井  
三明  
史部



新もさあさる川へ入るのゆゑ  
斗あさけあさけのま  
ふあまあまのまのまのま  
物あやあやあやあやあや  
新もさあさる川へ入るのゆゑ

新  
斗  
あ  
ま  
あ  
ま  
あ  
ま  
あ  
ま

古人五百歌 六三三部目錄

降りの部		時修之部	
神楽	神楽	神楽	神楽
志の部	志の部	志の部	志の部
あ	あ	あ	あ
八	八	八	八
九	九	九	九
十	十	十	十
十一	十一	十一	十一
十二	十二	十二	十二
十三	十三	十三	十三
十四	十四	十四	十四
十五	十五	十五	十五
十六	十六	十六	十六
十七	十七	十七	十七
十八	十八	十八	十八
十九	十九	十九	十九
二十	二十	二十	二十
二十一	二十一	二十一	二十一
二十二	二十二	二十二	二十二
二十三	二十三	二十三	二十三
二十四	二十四	二十四	二十四
二十五	二十五	二十五	二十五
二十六	二十六	二十六	二十六
二十七	二十七	二十七	二十七
二十八	二十八	二十八	二十八
二十九	二十九	二十九	二十九
三十	三十	三十	三十
三十一	三十一	三十一	三十一
三十二	三十二	三十二	三十二
三十三	三十三	三十三	三十三
三十四	三十四	三十四	三十四
三十五	三十五	三十五	三十五
三十六	三十六	三十六	三十六
三十七	三十七	三十七	三十七
三十八	三十八	三十八	三十八
三十九	三十九	三十九	三十九
四十	四十	四十	四十
四十一	四十一	四十一	四十一
四十二	四十二	四十二	四十二
四十三	四十三	四十三	四十三
四十四	四十四	四十四	四十四
四十五	四十五	四十五	四十五
四十六	四十六	四十六	四十六
四十七	四十七	四十七	四十七
四十八	四十八	四十八	四十八
四十九	四十九	四十九	四十九
五十	五十	五十	五十
五十一	五十一	五十一	五十一
五十二	五十二	五十二	五十二
五十三	五十三	五十三	五十三
五十四	五十四	五十四	五十四
五十五	五十五	五十五	五十五
五十六	五十六	五十六	五十六
五十七	五十七	五十七	五十七
五十八	五十八	五十八	五十八
五十九	五十九	五十九	五十九
六十	六十	六十	六十
六十一	六十一	六十一	六十一
六十二	六十二	六十二	六十二
六十三	六十三	六十三	六十三
六十四	六十四	六十四	六十四
六十五	六十五	六十五	六十五
六十六	六十六	六十六	六十六
六十七	六十七	六十七	六十七
六十八	六十八	六十八	六十八
六十九	六十九	六十九	六十九
七十	七十	七十	七十
七十一	七十一	七十一	七十一
七十二	七十二	七十二	七十二
七十三	七十三	七十三	七十三
七十四	七十四	七十四	七十四
七十五	七十五	七十五	七十五
七十六	七十六	七十六	七十六
七十七	七十七	七十七	七十七
七十八	七十八	七十八	七十八
七十九	七十九	七十九	七十九
八十	八十	八十	八十
八十一	八十一	八十一	八十一
八十二	八十二	八十二	八十二
八十三	八十三	八十三	八十三
八十四	八十四	八十四	八十四
八十五	八十五	八十五	八十五
八十六	八十六	八十六	八十六
八十七	八十七	八十七	八十七
八十八	八十八	八十八	八十八
八十九	八十九	八十九	八十九
九十	九十	九十	九十
九十一	九十一	九十一	九十一
九十二	九十二	九十二	九十二
九十三	九十三	九十三	九十三
九十四	九十四	九十四	九十四
九十五	九十五	九十五	九十五
九十六	九十六	九十六	九十六
九十七	九十七	九十七	九十七
九十八	九十八	九十八	九十八
九十九	九十九	九十九	九十九
一百	一百	一百	一百



指	三十三	水目	三十三	水目	三十三
水の目	三十四	水の目	三十五	水の目	三十六
水の目	三十五	水の目	三十六	水の目	三十七
水の目	三十六	水の目	三十七	水の目	三十八
水の目	三十七	水の目	三十八	水の目	三十九
水の目	三十八	水の目	三十九	水の目	四十
水の目	三十九	水の目	四十	水の目	四十一
水の目	四十	水の目	四十一	水の目	四十二
水の目	四十一	水の目	四十二	水の目	四十三
水の目	四十二	水の目	四十三	水の目	四十四
水の目	四十三	水の目	四十四	水の目	四十五
水の目	四十四	水の目	四十五	水の目	四十六
水の目	四十五	水の目	四十六	水の目	四十七
水の目	四十六	水の目	四十七	水の目	四十八
水の目	四十七	水の目	四十八	水の目	四十九
水の目	四十八	水の目	四十九	水の目	五十
水の目	四十九	水の目	五十	水の目	五十一
水の目	五十	水の目	五十二	水の目	五十三
水の目	五十一	水の目	五十三	水の目	五十四
水の目	五十二	水の目	五十四	水の目	五十五
水の目	五十三	水の目	五十五	水の目	五十六
水の目	五十四	水の目	五十六	水の目	五十七
水の目	五十五	水の目	五十七	水の目	五十八
水の目	五十六	水の目	五十八	水の目	五十九
水の目	五十七	水の目	五十九	水の目	六十
水の目	五十八	水の目	六十	水の目	六十一
水の目	五十九	水の目	六十二	水の目	六十三
水の目	六十	水の目	六十四	水の目	六十五
水の目	六十一	水の目	六十五	水の目	六十六
水の目	六十二	水の目	六十六	水の目	六十七
水の目	六十三	水の目	六十七	水の目	六十八
水の目	六十四	水の目	六十八	水の目	六十九
水の目	六十五	水の目	六十九	水の目	七十
水の目	六十六	水の目	七十	水の目	七十一
水の目	六十七	水の目	七十一	水の目	七十二
水の目	六十八	水の目	七十二	水の目	七十三
水の目	六十九	水の目	七十三	水の目	七十四
水の目	七十	水の目	七十四	水の目	七十五
水の目	七十一	水の目	七十五	水の目	七十六
水の目	七十二	水の目	七十六	水の目	七十七
水の目	七十三	水の目	七十七	水の目	七十八
水の目	七十四	水の目	七十八	水の目	七十九
水の目	七十五	水の目	七十九	水の目	八十
水の目	七十六	水の目	八十	水の目	八十一
水の目	七十七	水の目	八十一	水の目	八十二
水の目	七十八	水の目	八十二	水の目	八十三
水の目	七十九	水の目	八十三	水の目	八十四
水の目	八十	水の目	八十四	水の目	八十五
水の目	八十一	水の目	八十五	水の目	八十六
水の目	八十二	水の目	八十六	水の目	八十七
水の目	八十三	水の目	八十七	水の目	八十八
水の目	八十四	水の目	八十八	水の目	八十九
水の目	八十五	水の目	八十九	水の目	九十
水の目	八十六	水の目	九十	水の目	九十一
水の目	八十七	水の目	九十一	水の目	九十二
水の目	八十八	水の目	九十二	水の目	九十三
水の目	八十九	水の目	九十三	水の目	九十四
水の目	九十	水の目	九十四	水の目	九十五
水の目	九十一	水の目	九十五	水の目	九十六
水の目	九十二	水の目	九十六	水の目	九十七
水の目	九十三	水の目	九十七	水の目	九十八
水の目	九十四	水の目	九十八	水の目	九十九
水の目	九十五	水の目	九十九	水の目	一百

古人の言蹟を白集

南總 曠旭 龍龜足 校合

水之部

水

神水やまの標のそよのまらむかや  
 はつちやわらふかきそよふ標のそよ  
 神水やまの標のそよのまらむかや  
 はつちやわらふかきそよふ標のそよ  
 神水やまの標のそよのまらむかや  
 はつちやわらふかきそよふ標のそよ

芭蕉翁  
 其角  
 柳津  
 明坡  
 水部

神中のまきかちし春のふ  
はつゆふあまの神と相のまに  
まのまをわさるゑかきし  
神中より風はるにまはりて  
けつまのふんまふらるのま  
ゆふゆふのまをまきし  
まのまをわさるゑかきし  
神中よりまをまきし  
まのまをわさるゑかきし  
まのまをわさるゑかきし

孤屋  
聖之  
伴六  
仙化  
利牛  
吉来  
山川  
本因  
具角  
和及  
柳枝  
る舟

雪

はつゆふあまの神と相のまに  
まのまをわさるゑかきし  
神中よりまをまきし  
まのまをわさるゑかきし  
まのまをわさるゑかきし  
まのまをわさるゑかきし  
まのまをわさるゑかきし  
まのまをわさるゑかきし  
まのまをわさるゑかきし  
まのまをわさるゑかきし

雪士  
舞文  
、  
、  
霜  
去来  
具角  
嵐雪  
危貴  
湖表



雪

志  
死

海山の冬雪とてぬたう  
久波を吹かて新吹雪とて  
秋の雪も多しとて  
山雪の積る下り雪は  
くけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中

乙卯  
本意  
秋の雪  
雪の積  
湖夕  
去来  
出心

志中たまたま雪のくけ  
雪もしくは雪もあは  
一志死く来雪のくけ

去来  
雪指  
蓮口

時

時  
新雪の積る中  
雪のくけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中  
雪のくけそ新雪の中

去来  
雪指  
蓮口  
乙卯  
本意  
秋の雪  
雪の積  
湖夕  
去来  
出心

志の巻

向の系を考へて盤のるや砂の  
みの事は板のすくをくく  
神一これ小端の事これ若夫加減  
抗七受もわよ事考の砂の時

柳井  
多岐  
馬草  
宣守

志の事や田のあゝ株のくら  
ねるおの事や田のあゝ株のくら  
雲よりも出くまはるく  
一これ又くら地は、時  
馬くら神の志の事  
一これ又くら地は、時  
神の事

其角  
志  
霞  
土草  
村園  
石

千浦の事や田のあゝ株のくら  
ねるおの事や田のあゝ株のくら  
雲よりも出くまはるく  
一これ又くら地は、時  
馬くら神の志の事  
一これ又くら地は、時  
神の事

其角  
志  
霞  
土草  
村園  
石

漸々を結成を志すれり  
志の向くは東の志の  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す

此の  
凡北  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角

み  
れ

足るを志す  
志の向くは東の志の  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す

此の  
凡北  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角

寒  
る

足るを志す  
志の向くは東の志の  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す  
安らぐに物産志す

此の  
凡北  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角  
其角



雨敷

いり丸くさきあはれぬの捨り  
 新雨とさしつと清し玉あき  
 ちとらふてりぬ地すす雨敷い  
 籠の後のつはれさあきれう形  
 持のさきにたれしあはれあき  
 ふのつはれあきあきあき  
 五あきあきあきあきあき  
 捨りあきあきあきあきあき  
 湯あきあきあきあきあき  
 新雨とさしつと清し玉あき  
 ちとらふてりぬ地すす雨敷い

箱 嵐 土 圃 耕 雲 卯 七 聖 彼 雨 表 柳 枝 巴 立 昌 身 柳 枝

雨相

あきさきにさきあはれぬの捨り  
 新雨とさしつと清し玉あき  
 ちとらふてりぬ地すす雨敷い  
 籠の後のつはれさあきれう形  
 持のさきにたれしあはれあき  
 ふのつはれあきあきあき  
 五あきあきあきあきあき  
 捨りあきあきあきあきあき  
 湯あきあきあきあきあき  
 新雨とさしつと清し玉あき  
 ちとらふてりぬ地すす雨敷い

箱 嵐 土 圃 耕 雲 卯 七 聖 彼 雨 表 柳 枝 巴 立 昌 身 柳 枝

水 柱

さくしやあはれはあひあはれちうら  
一色もこころをのちまふあまのむらじ  
柳をくちうらにはにほしとくちのあ

あまを  
あまを  
あまを

あふし—さよやけしんあのを  
あのをあやふ家の飾の伸ちうら

あま  
あま

井はさきのさきあふまにさき水柱は  
あふし—らのほらさきさきあふま  
あふまのあり—あふまのほらさき  
川をさきさきのさきあふま

あま  
あま  
あま

水 柱

あふまのさきあふまのさき水柱は  
あふまのさきあふまのさきあふま  
あふまのさきあふまのさきあふま  
あふまのさきあふまのさきあふま  
あふまのさきあふまのさきあふま  
あふまのさきあふまのさきあふま  
あふまのさきあふまのさきあふま  
あふまのさきあふまのさきあふま  
あふまのさきあふまのさきあふま  
あふまのさきあふまのさきあふま

あま  
あま  
あま  
あま  
あま  
あま  
あま  
あま  
あま  
あま

小 春

時を過ぎるのあつし一見の春の光  
 てうしつとほのそよよさあけさか  
 空の中は一瞬の光りあを海に  
 名所の影よあ春の目さし  
 けしの影あけつ木のあさつ  
 朝霞してあををあさつ  
 葉舟のあさつあさつあさつ  
 見の色に遠くあさつあさつ  
 野のそよよけてあををあさつ  
 野さしちあさつあさつあさつ  
 館長員よあさつあさつあさつ

改題  
 柳妖  
 理給  
 春風  
 春の甲  
 春の甲  
 思ふ  
 函名  
 字名  
 印名

霜 脚 走

霜のあつたはくしあつたあつた  
 志のあつたあつたあつたあつた  
 志のあつたあつたあつたあつた

霜  
 志  
 志

何よけ脚走のあつたあつたあつた  
 限れりう脚走のあつたあつたあつた  
 山伏のあつたあつたあつたあつた  
 世のあつたあつたあつたあつた  
 志のあつたあつたあつたあつた  
 志のあつたあつたあつたあつた  
 志のあつたあつたあつたあつた  
 志のあつたあつたあつたあつた

霜  
 志  
 志  
 志  
 志  
 志  
 志  
 志

至

至のしは友のよは志はをまが  
至のつはくはあををうけ  
門のあめあも遊をうらむ

乙砂  
赤井  
九北

神送

そがあふのまや神ゆらう  
月はあふ連り月ぬく神送  
あうらあ雲のりし神ゆらう  
け星の牛のまは神ゆらう  
書の名のあを神ゆらう

霧川  
司鏡  
降五  
赤奴  
史部

神下

神心くはあのまは  
神心くはあのまは

巴  
玖

神名

あまのりかひまき神の名ま  
あまのりかひまき神の名ま  
神名もあまのりかひまき  
はくま神の名ま

赤  
赤平  
赤井  
赤身

子種

振る實の一原あはし  
はくま神の名ま  
先細やあまのりかひまき  
あまのりかひまき神の名ま

赤  
赤角  
赤井  
赤身

子系

子あまのりかひまき  
子あまのりかひまき  
子あまのりかひまき  
子あまのりかひまき

山  
赤井  
赤身





# 純 敲

純は切き志はしき純字もよ  
 りの古に純景もよよけち多し  
 なる條か床川純を純字もよ  
 今よし一年もよんし純敲  
 抄りたもよよめ時もけち多し  
 純もよよとあま愛の物のや  
 函もよよ、吹しき純もよ  
 縁もよ何とよよと純叩  
 狼もよししき純もよよ  
 抄りたし、吹しき純叩  
 抄りたし、吹しき純叩  
 抄りたし、吹しき純叩  
 抄りたし、吹しき純叩

純  
 志  
 其  
 山  
 曲  
 山  
 智  
 本  
 法  
 心  
 大

# 大 師 傳 空 心 傳

純もよよ、吹しき純もよ  
 縁もよ何とよよと純叩  
 狼もよししき純もよよ  
 抄りたし、吹しき純叩  
 抄りたし、吹しき純叩  
 抄りたし、吹しき純叩  
 抄りたし、吹しき純叩

純  
 志  
 其  
 山  
 曲  
 山  
 智  
 本  
 法  
 心  
 大

落

葉

近年のりしむを二庭のなをふじ  
程子ゆらすはのちの中のかちそく  
わくわくやあつたあつたあつた  
節の距子かくはあちちこく程  
極子置くまの福子さうはなま  
味しきち懐くくも地ちそく  
さひひくく老天あまの物まなま  
松葉よるのまはくく山ぬく  
いふあをひくくにあまの地ちそく  
わのあをまの定まはなま  
狼のそをなまはちちそく  
ふ入て海まはくくなま

落  
如新  
巴凡  
梅脚  
牧量  
巴静  
吾伴  
東石  
多崎  
乙助  
程己  
木兒

木乃葉

木乃葉

ふ入の山もあまの木のま  
あまの山もあまの木のま  
大くこの木のまあまのま  
あまの山もあまの木のま  
あまの山もあまの木のま  
あまの山もあまの木のま  
あまの山もあまの木のま

落  
宇本  
杉凡  
木葉  
吉葉  
柳葉

あまの山のまあまのま  
あまの山のまあまのま  
あまの山のまあまのま  
あまの山のまあまのま  
あまの山のまあまのま  
あまの山のまあまのま  
あまの山のまあまのま

落  
木葉  
山門  
其角



風

風子 風の吹くやうに杉の葉の  
まのりや 陣のうらやまの山の切  
風のそとをさるあつらう海の手  
まのりの一のりてゆくよりの  
風に 一のりのひかりのちのち  
あつらう風よあまの葉の葉の  
まのりや 陣のうらやまの山の切  
風のそとをさるあつらう海の手  
まのりの一のりてゆくよりの  
風に 一のりのひかりのちのち  
あつらう風よあまの葉の葉の

其角  
言え  
子英  
子梅  
嵐雪  
志考  
林紅  
比休  
凡兆

柳枯

まのりや 陣のうらやまの山の切  
風のそとをさるあつらう海の手  
まのりの一のりてゆくよりの  
風に 一のりのひかりのちのち  
あつらう風よあまの葉の葉の  
まのりや 陣のうらやまの山の切  
風のそとをさるあつらう海の手  
まのりの一のりてゆくよりの  
風に 一のりのひかりのちのち  
あつらう風よあまの葉の葉の

一説  
三峰  
蓮雪  
柳花  
石竹  
怪物  
源巻  
執人  
花竹

喜 子

喜をちりつ喜をちりつ喜をちりつ  
喜をちりつ喜をちりつ喜をちりつ  
喜をちりつ喜をちりつ喜をちりつ

喜 子  
喜 子  
喜 子

帰 花

帰花をちりつ喜をちりつ喜をちりつ  
帰花をちりつ喜をちりつ喜をちりつ  
帰花をちりつ喜をちりつ喜をちりつ

喜 子  
喜 子  
喜 子

批 把

批把をちりつ喜をちりつ喜をちりつ  
批把をちりつ喜をちりつ喜をちりつ  
批把をちりつ喜をちりつ喜をちりつ

批 把  
批 把  
批 把

山 茶

山茶をちりつ喜をちりつ喜をちりつ  
山茶をちりつ喜をちりつ喜をちりつ  
山茶をちりつ喜をちりつ喜をちりつ

山 茶  
山 茶  
山 茶

山

山をめぐりてはるかにあそぶに  
いよあやうく風をよみてあそぶ

山  
山

梅

梅をよみてはるかにあそぶに  
いよあやうく風をよみてあそぶ  
梅をよみてはるかにあそぶに  
いよあやうく風をよみてあそぶ

梅  
梅

雪

雪をよみてはるかにあそぶに  
いよあやうく風をよみてあそぶ

雪  
雪

梅

梅をよみてはるかにあそぶに  
いよあやうく風をよみてあそぶ

梅  
梅

山

山をよみてはるかにあそぶに  
いよあやうく風をよみてあそぶ

山  
山

雪

雪をよみてはるかにあそぶに  
いよあやうく風をよみてあそぶ

雪  
雪



石 花 花 花 花 花

河原に... 石花の... 花の... 花の... 花の... 花の...

如新 唐元 朝存 神牛 古比

花の... 花の... 花の... 花の... 花の... 花の... 花の...

苔翠 石牛 石牛 石牛 石牛 石牛

山 花 花 花 花 花

山花... 花の... 花の... 花の... 花の... 花の... 花の...

利牛 杉風 愚了 為者 杉風 尚白 素牛 冰花 京名 其角 花結



大 招 川 正 業 忍

新垣に少坊と書ありち招川  
お女に投て運はわ大根ひき  
多勢の河原に二把大根出た  
野合の村志おれりち招川

新 許六  
初足  
酒中

新出やよまに終きぬはの書  
そはくりの松のふおあむ孝うね  
若きまふ新やふあてふ終業馬師  
一おししんまふあや約千業  
風のふ屋平、字一はり千業  
比とのりき強きま切の白ひか  
若名や世りしきそのまよお務を

新 招川  
初足  
酒中

新 熊 一 升 忍

ままちた子狐の穴を火ひらり  
母をたてて音無きあり一業  
のわくりしやまふ一の字  
まふ新や一勝者又あふ風  
むきおたや死ぬりりの親父連

新 一升  
初足  
酒中

ままちた子狐の穴を火ひらり  
母をたてて音無きあり一業  
のわくりしやまふ一の字  
まふ新や一勝者又あふ風  
むきおたや死ぬりりの親父連

新 一升  
初足  
酒中

ふ

よぢりねのりつち村々  
あつ後子つと列りなる  
浦風や地たまへる世ら  
お指てやの玉川もあや  
ひつちてりまのあふて  
一羽さきつこね時安と  
ひまきてあつあふあつ  
ひつちにもおむす川  
あつちつとねつとあつ  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと

其角 去来 菅原 西古 少那 巴那 乙中 糸園 杉本 山文 相海

あ

あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと  
あつちつとあつちつと

李生 好我 冠貴 備如 由之 揚水 乙中 乙中



# 鴨

久しきをるを来たす都のお野うら  
 ち入るとは遠くし此の野  
 けし向や直海の野のはくは  
 夜ありしや野の終すも木柳越  
 へ山野を大追うる境にうら  
 鴨 高倉ののめしあさるる中  
 言 蝶よ鴨もあうら羽さうら  
 鴨 竹やわす矢を捨てすま子  
 けあゆむ月のあまはたはあ野  
 野 啼わ風は志をむくみの野

大野  
 北枝  
 机付  
 西秀  
 名木  
 朱林  
 怒風  
 吉来  
 杜若  
 る印

# 北

# か

# 木

# の の 境

後のまのうらをまらわ北のぬまの  
 糸の先のうらまののゆしぬまの  
 杖士のえんうら中や知のあや  
 押さうのうらおらんう 朝 嵐  
 かしつうう都えあさう又をう  
 鈴細のぬの下やふはあさ  
 木をわやゆりしあさうは堂のはら  
 くのくのゆわ木の葉のなまうま  
 木をのゆらまはまをわさ  
 将中あてあうらう人あんの境  
 今ま世をむむらうわあんの境  
 木をのゆらまはまをわあんの境

鴨  
 操言  
 木部  
 里圃  
 翁  
 案牛  
 其境  
 舟尋  
 江棧  
 其角  
 且菜  
 石明

庭身

死をまて探りぬらん  
庭身の月の影をまはさ  
はてみくらぬを  
庭身の月よさよふたのし

田舎  
大草  
里園  
木等  
琳

将

前にもなる解くは  
将の神遊と  
するおしの候を

使邦  
出公  
支考  
お中  
作者  
不詳

夜 其 録

おに入るもの  
おのうき  
おのうき  
おのうき  
おのうき  
おのうき  
おのうき  
おのうき  
おのうき  
おのうき

徒者  
丹丘  
尺素  
泉石  
ゆら  
風律  
コ  
路  
茶  
尺  
若



所 河 脈

脈をいへば、水は山より下りて、谷を流るるなり。其の流るる所を脈と云ふ。脈は、水の流れの道なり。脈は、水の流れの道なり。脈は、水の流れの道なり。

其角 不卜 嵐雪

ある河も、水は山より下りて、谷を流るるなり。其の流るる所を脈と云ふ。脈は、水の流れの道なり。脈は、水の流れの道なり。脈は、水の流れの道なり。

其角 一洞 水作 久岳 其角

所 河 脈

ある河も、水は山より下りて、谷を流るるなり。其の流るる所を脈と云ふ。脈は、水の流れの道なり。脈は、水の流れの道なり。脈は、水の流れの道なり。

志和 己而 西里 菊色 雪は是 及そ 乙妙 支考 湯葉 其角 た説

世に

松葉の枝をて多枝あめはるこり船  
漕網の止園のきもき一急の船  
小舟にこしと帆をたて入江に  
舟をたひくき流つて運る寒く舟  
舟のゆりあつて舟をたてきむき  
漕舟のゆりあつて舟をたてきむき  
舟をたひくき流つて運る寒く舟  
舟のゆりあつて舟をたてきむき  
漕舟のゆりあつて舟をたてきむき  
舟をたひくき流つて運る寒く舟  
舟のゆりあつて舟をたてきむき

為  
其角  
去来  
涼菴  
湖春  
利牛  
浮六  
野坡  
金屋  
末導

廿六

かき舟の一舟もあつて舟をた  
門をくくせ舟をたて舟をた  
若くは舟のたのきむき  
舟をたひくき流つて運る寒く舟  
舟のゆりあつて舟をたてきむき  
漕舟のゆりあつて舟をたてきむき  
舟をたひくき流つて運る寒く舟  
舟のゆりあつて舟をたてきむき  
漕舟のゆりあつて舟をたてきむき  
舟をたひくき流つて運る寒く舟  
舟のゆりあつて舟をたてきむき

風国  
舟足  
舟之  
桂之  
正勝  
乙舟  
採志  
舟舟  
賊舟



如

子夜の如くすべし人の比ぬれし  
冬ぬれすべし人の比ぬれし  
好加一丁もぬれすべし

其角  
海部

子

子夜の如くすべし人の比ぬれし  
冬ぬれすべし人の比ぬれし  
好加一丁もぬれすべし

其角  
海部

中

中夜の如くすべし人の比ぬれし  
冬ぬれすべし人の比ぬれし  
好加一丁もぬれすべし

其角  
海部

足

足夜の如くすべし人の比ぬれし  
冬ぬれすべし人の比ぬれし  
好加一丁もぬれすべし

其角  
海部

# 火 燧

何れも火燧のたき火を運火燧  
 たること地味にあらむことつら  
 物かすすうとさき火燧の  
 多程の多量をかき火燧の  
 多量をかき火燧の多  
 山をたき火燧の多  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の

火燧  
 多量  
 火燧  
 多量  
 火燧  
 多量  
 火燧  
 多量  
 火燧  
 多量  
 火燧  
 多量

十九

# 火 埋

火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の  
 火燧の多量をかき火燧の

火燧  
 多量  
 火燧  
 多量  
 火燧  
 多量  
 火燧  
 多量  
 火燧  
 多量  
 火燧  
 多量



火桶

火鉢

湯婆

綿糸

おろしすのすれ時常火桶の  
あふちの品を平しく火おけり  
抱て居ても以て多き火桶の  
火桶抱て頭縁をかへし

おやうのわ志うと火鉢も火の  
暖火草と指し鉢を火鉢に  
折しと火鉢のとのものよ

当たらぬのふ人あやまむ時のお  
くなく湯婆あふちの品  
あふちも入る鉢の川糸糸糸  
煮しの中し鉢のふくつはし

火桶  
火鉢  
湯婆  
綿糸

お掛

火盆

お掛は火盆に志はし  
蕨の葉其根植おけり  
一寸らお掛お志のあや  
おこのはくはし茶の香の  
おのらお掛お志のあや  
おのらお掛お志のあや

おろしすのすれ時常火桶の  
あふちの品を平しく火おけり  
抱て居ても以て多き火桶の  
火桶抱て頭縁をかへし

お掛  
火盆  
火桶  
火鉢

お掛  
火盆  
火桶  
火鉢

納事 子孫 功口

功口子孫の徳を形つゝに  
のち起るやまゝ内儀をかは京  
りたりやの如く作し  
つちさうや書用をぬき  
功口や茶入や蓋をやり  
志こしく候彼字をいのかう  
るまゝあるれどもうらまの  
い云候もろく結書のみ  
身代も終て志れり事納  
金云く中をほくして  
おま

納 功口  
事 子孫  
功口  
納事  
功口  
納事  
功口

納事 子孫 功口

納事子孫の徳を形つゝに  
のち起るやまゝ内儀をかは京  
りたりやの如く作し  
つちさうや書用をぬき  
功口や茶入や蓋をやり  
志こしく候彼字をいのかう  
るまゝあるれどもうらまの  
い云候もろく結書のみ  
身代も終て志れり事納  
金云く中をほくして  
おま

納 功口  
事 子孫  
功口  
納事  
功口  
納事  
功口



指

おこの火や燄くこのぬこの天  
指のちやあさうに啼さうくす  
けこの火に親子正たはひ舞か  
あまの火に船の色のあうり  
燄をめぐる命しほし指の城  
形らびや指天子あさうはう後

文彦  
香川  
吉集  
指志  
何合  
る印

炭 空

すこの空のよ夏の花の側道りう  
炭のほやひる忽れと指のこ  
さふかたや葉のうておる夕燄  
炭焼のひうりあうん空の燄  
ささ中ややゆりやうさすひう

元兆  
風律  
巴人  
其本  
柳右

炭

炭やうも夏やあ花のふ舞か  
すこの空の山一葉は白ひる

潤務  
石明

かこの炭まらこの木の葉より純り  
炭たままきまき水霞年か  
はくすまきまきあうりや火燄  
いさうや葉よさうあまの空か

其角  
炭雪  
経口  
鉄舟

炭 賣

炭賣やあ花まひるの明たう  
すまき賣のちたう葉よさあかあ

梅と  
空五

おろ

いふやや寝のさるておのの  
はあはの身もさう通すおの  
あは猫のかりおすおやあ  
おははしこおをぬのえい  
相の木のあをさうしおの  
多柳おすおちとておの  
お三つの一のさおおの  
おのの柳をさすおの  
おさうさあおおの  
お家の外がさおの  
お縁の右端さうしおの

其角  
杉  
大草  
おさ  
高院  
乃府  
本導  
押重  
母科  
る

おの  
入の

寒のやあ合おいさ  
おのやあをさうさ  
けさの影さあ  
おあのおさ  
お入をさうさ

高号  
深急  
柳  
お

おの  
ち

靴鞋もさあ  
おのの  
おのの  
おのの

高  
お  
お  
お

おの  
おの

寒の坂の  
おのの  
おのの

高  
お  
お









年  
本  
想

年本想をいふは子年本想  
みくもや様のいふは子年本想

年本  
柳

年  
忘

甘んじて年をいふは子年本想  
年をいふは子年本想

年本  
忘

年  
新

新の年や待ちし神はそ人年  
行せし年をいふは子年本想

年本  
新

年  
元

元は年をいふは子年本想  
一は年をいふは子年本想

年本  
元

年  
春

春は年をいふは子年本想  
春は年をいふは子年本想

年本  
春

年  
去

去は年をいふは子年本想  
去は年をいふは子年本想

年本  
去

年  
あ

あは年をいふは子年本想  
あは年をいふは子年本想

年本  
あ



切實の御子歳人年のあはれ  
くもす一精録わさしめくま  
つたるの星や柳子赤心  
誇るお知年入もあうけしめ

醉山  
荻子  
柳子  
李由

年之内春

年のうちに踏さる春のあはれ  
連歌師の志事とわらわの春  
さるの鳥相くまねし年のうち  
春の心を足しと柳子赤心の内  
年のうち遠きあひしうま

李由  
許六  
志士  
去取  
柳子

新詠録

春のあはれ家ま入ると春の梅  
連他のかうと春の梅  
春のあはれと春の梅  
山ハしあはれ大和引へく野ハありぬ  
古く昔はしと春の梅  
星ささる江の御と春の梅  
春のあはれと春の梅  
雪あはれ心のうらむと春の梅  
春のあはれと春の梅  
春のあはれと春の梅

花雪  
一盤  
涼花  
也方  
嵐雪  
露花  
夕景  
里圃  
春由



安んずるや其が秘して其の妙ありし事徳龜瓜の古より  
前鑑ありて板子紙を方の紙より紙を好むをいし冊子  
残して今人其を紙といふを翻んとすむ紙の古より  
其法よりなり紙の紙を紙にして社友の力を得む  
身ありしを紙とていふに紙より紙を紙と  
いふより人実あると紙を紙と紙を紙と  
紙を紙と紙を紙と

徳龜龜草亭氣海

近刻

續篇今人其の歌紙の句集 乾坤二巻



生る

一巻一巻に中巻を安んず七十二巻あり  
いつとも造化のあす所ありて安んず  
其のちのちつらむは紙の風流あり  
安んず紙のよき造化のあす然  
其のよきをいふは是思  
其の紙の中をいふは是思  
よき得紙すは是思



了  
解  
子  
七

丁未就集伴復

杉  
山  
菴  
菴  
刊

東  
都  
書  
肆

日本橋新右衛門町

上總屋忠助

浅草南馬道町

桑村半藏

求板

